



**Data**

監督: イ・ファンギョン  
 出演: チョン・ウ/オ・ダルス/キム・ヒウオン/キム・ビョン  
 チョル/イ・ユビ/チョ・ヒョン  
 チョル/チ・スンヒョン/キム・ソンギョン/ヨム・ヘラン

## 👁️👁️ みどころ

大統領選に出馬するために帰国した野党総裁は、拉致され自宅軟禁状態に！平和と民主主義、そしてバブル直前の経済成長を誇っていた日本の隣国・韓国の、1985年の姿がそれだ。

国家挙げての“盗聴”は『善き人のためのソナタ』（06年）を、国家挙げてのスパイ活動はキム・ギドク監督の『レッド・ファミリー』（13年）を観れば明らかだが、その不合理性、非人間性は現在のミャンマーの軍事政権が野党指導者アウン・サン・スー・チー氏に取っている措置と対比しながらしっかり考えたい。

本作前半の“盗聴ストーリー”は『エクストリームジョブ』（19年）と同じようにギャグ色満載で、いかにも韓国流。しかし、後半からの人間ドラマと大統領候補の暗殺を巡るスリリングな展開は見どころいっぱいだ。こりゃ面白い！こりゃすごい！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ 韓国は政治ドラマが面白い！1985年にこんな事件が■□■

「金大中事件」は1973年に起きた日本人もよく知っている大事件。それに対して、1985年の軍事政権下の韓国で、次期大統領に出馬することを決めた野党政治家が国家安全政策部により拉致され自宅軟禁を余儀なくされたことをあなたは知っている？それを「知っている」と答えた人がいれば、その人は嘘つきだ。なぜなら、それは現実ではなく、私は見逃してしまっただが『7番房の奇跡』（13年）を大ヒットさせたイ・ファンギョン監督が本作で描いた架空のドラマだからだ。

本作冒頭、空港に降り立った野党総裁イ・ウィシク（オ・ダルス）がいとも簡単に拉致されてしまうシークエンスが登場する。民主化運動を目の敵にしている1985年当時の

軍事政権なら、こんなことが簡単にできるの？ウィシクに対する処分は自宅軟禁だが、これは適当な罪名をひねり出すまでの暫定的処置で、ウィシクが大統領選挙への出馬を断念して外国に出て行けばそれでよし。あくまで出馬を狙うなら、次は国家転覆罪などの罪名をなすり付ける魂胆だ。

その証拠集めとウィシクの監視のため、諜報機関の責任者・キム室長（キム・ヒウォン）は、ウィシクの自宅の隣家ですでに盗聴活動を続けていたドンシク（キム・ビョンチョル）とヨンチョル（キム・ヒョンチョル）に加えて、新たにチーム長、ユ・デグオン（チョン・ウ）を任命。釜山出身のデグオンはその抜擢に感激し、全力で任務に当たることを誓って赴任したが・・・。

## ■□■自宅軟禁の効用は？盗聴の効用は？■□■

戦後の、平和と民主主義を愛する日本ではスパイ活動や盗聴活動は忌み嫌われてきた。しかし、『007』シリーズ等のスパイ映画では盗聴は高等技術の1つだし、東西冷戦下の東ドイツでは『善き人のためのソナタ』（06年）（『シネマ14』208頁）を観れば、国家保安省（シュタージ）という国家機関による盗聴システムの姿を理解することができる。また、キム・ギドク監督の『レッド・ファミリー』（13年）（『シネマ33』227頁）を観れば、北朝鮮という国家挙げてのスパイ活動や盗聴活動の恐るべき実態を理解することができる。

しかし、日米同盟と同じように韓米同盟を結んでいる韓国は民主主義国家で、かつての東ドイツや現在の北朝鮮のような監視国家・スパイ国家ではないから、盗聴などありえない！ついそう思うてしまうが、1985年の軍事政権下の韓国はそうではなかったことを、まず本作導入部でしっかり理解する必要がある。

キム室長から高級腕時計を左腕にはめてもらい、意気揚々と現地へ乗り込んだデグオンは、事務所内にターゲットのリビングルームを中心とする居住空間を再現し、一家の1日のスケジュールと家族の会話、客や荷物の出入り、果ては食生活や健康状態をすべて把握。あらゆる声と音に耳をそばだたせて、キム室長に報告書を上げていくことに。他方、こんな風に一気にウィシクの盗聴体制が強化されたことによって、ウィシクは発言と行動の自由を完全に奪われ、丸裸にされていくことに。

## ■□■野党総裁の家族は？盗聴チームとの人的交流は？■□■

『パラサイト 半地下の家族』（19年）（『シネマ46』14頁）を観ても、『いつか家族に』（15年）（『シネマ44』167頁）を観ても、韓国映画の特徴の1つは家族の熱さの描き方。そこには、山田洋二監督がさまざまな名作で描いてきた日本の家族の風景とは違う面白さがある。それは本作でも顕著で、自宅軟禁を余儀なくされている野党総裁・ウィシクはもとより、彼の家族の姿はデグオンが構築した万全の盗聴システムによって丸裸にされてしまうから、それに注目！デグオンの基本方針は「同じ時刻に同じものを食い、同じ時刻にクソして」と言うものだから、家政婦が買う日常の食料品は特に要注意らしい。

ウィシクは牛乳に弱く、牛乳を飲むとすぐに下痢をするそうだが、それならデグオンたちも・・・。

本作は導入部に見る盗聴機の仕掛けのストーリーでも便所の肥溜めが描かれるので、スクリーン上が少し臭ってくる(?)が、この下品さ(?)も、『パラサイト 半地下の家族』の導入部と同じように韓国映画の特徴?それはともかく、ちょっとしたきっかけでウィシクの自宅に入り込み、ウィシクとフランクな会話を交わすことになったデグオンは、盗聴ではない“生の交流”からは一体どんな情報を?そんなお隣り同士の交流の中でデグオンは、知っているはずのないウィシクの娘のウンジン(イ・ユビ)の名前を口走ってしまうなど、さまざまなミスを犯していくが、それも逆に愛嬌に・・・?さらに、ドンシクもあるきっかけでウンジンに一目惚れしたらしいから、アレ・・・。そんな盗聴チームの奮闘の中で、本作前半ではウィシクやウィシクの家族が丸裸にされていくから、そこから生まれる盗聴チームとの人的交流の在り方にしっかり注目したい。

### ■□■心の乱れが少しずつ!家族の乱れも行動に!■□■

今は亡きキム・ギドク監督特有の切り口で南北問題をテーマに脚本を書いた『レッド・ファミリー』(13年)はメチャ面白い映画だった。同作では、北の“素敵一家”と南の“ダメ一家”をとことん対比しながらレッド・ファミリーの悲哀に迫ったが、同作中盤に見る両家族の交流(監視)は、心温まるもの(?)になっていた。資本主義と共産主義、主義・主張は180度違っても、面と向かえば同じ人間同士、どこかで心が通じ合うものらしい。それは本作も同じで、徹底的に盗聴任務に励んでいるデグオンたちにも、日々の業務の中やちょっとしたミスを重ねながらも、ウィシクやその家族たちとの様々な心の交流が生まれてくることに。とりわけ、銭湯で“裸のふれあい”をしてみると、“悪の権化”であるはずの共産主義者、デグオンも意外にいい奴?

他方、感受性が強く理想に燃える大学生が政治に関心を持つと、たちまち反軍事政権の立場になるのは仕方ない。貧乏役人に過ぎないデグオンは仕事が忙しく、めったに家族そろって食事することはないし、兄弟や息子たちの考えを聞く機会もなさそうだが、ひょっとして彼らのうちの誰かが学生運動にかかわっているとしたら・・・?それはウィシクの側も同じで、感受性の強い娘のウンジンは、父親のせいで今は完全な軟禁状態にあるが、キャンパス生活の中ではどんな思想を持っているの?

盗聴作業を巡るドタバタ劇の中から少しずつそんな論点が見えてくると、イ・ファンギョン監督の人間の描き方に少しずつ納得!せっかくキム室長から高級腕時計をもらうほど期待されていたデグオンの身内が反軍事政権運動に参加していたことがわかると、当然のようにデグオンは危機に。「ならば、俺が直接ウィシク家の家宅捜索をしてウィシクの共産主義者ぶりを明確にする証拠を発見し、ウィシクの大統領選挙出馬を断念させてやる」と意気込んだキム室長がウィシクの自宅で見せる辣腕ぶり(ムチャ捜査ぶり)は、思いもかけないウンジンの犠牲を伴うことになったから、さあ、ウィシクやデグオンはどうするの?

キム室長の圧力のままにウィシクは国外への脱出を余儀なくされるの？そんな展開に注目！

## ■□■軍事政権下では、暗殺＝事故死もオーケー？■□■

2020年11月の総選挙でアウン・サン・スー・チー氏率いるNLD（国民民主連盟）が勝利し、単独政権を樹立したことによってミャンマーは急速に民主化に向かっていった。しかし、2021年2月1日の国軍による軍事クーデターによって、急速暗転。現在、アウン・サン・スー・チー氏は、本作のウィシクと同じように自宅軟禁されている。“自宅軟禁”は拘留所内や刑務所内での収監ではないから、自宅軟禁者であるウィシクと、自宅にやってくる客との面会は理論上は原則自由。しかし、現実はそのでないのは当然だ。しかし、今日はウィシクの古くからの同志で、右腕的存在のノグクがウィシクの自宅にやってきた。盗聴を恐れるノグクが政治の話題になると声を潜めたのは当然だから、デグオンたちはイライラ。モゾモゾと奇妙な音が続くのも気がかりだから、デグオンたちのイライラは募るばかりだ。

そんな中、ラジオの人気番組でウィシクがペンネームで送った投稿が読み上げられ、リクエスト曲の「クルクル」が4度にもわたって放送されたことを“発見”したドンシクは得意満面。「これはきっと北朝鮮への指令だ！」そんなドンシクの分析を採用したキム室長は、ただちに「クルクル」を含む危険な曲をラジオで流すことを禁じたが、さて、その効用は？

ウィシクとノグクとの自宅での協議内容はわからないものの、少しずつ“密”になっているらしい。キム室長がウィシク宅へのノグクの出入りを認めていたのは、ノグクのような“魚”を泳がすことによって有益な情報を得るためだったが、デグオンたちの盗聴作業で何ら成果を得られないのなら、もはや“魚”を泳がしておく価値はない。そう判断したキム室長は、ある日、部下に「今日は魚料理でも食おう」と誘ったが、そのココロは？その日、ウィシクの自宅を出たノグクの車は、ある所で突然横っ腹にトラックが衝突してきたから、たちまちノグクの命は奪われてしまうことに。これって、交通事故？それとも・・・？

ロシアで2006年に発生した、ロシア連邦保安局（FSB）元職員のアレクサンドル・リトビネンコの毒殺事件を見ても、近時の、シベリアの都市トムスクからモスクワに向かう旅客機の中で発生したプーチン批判の野党勢力の指導者、ナワリヌイの暗殺（毒殺）未遂疑惑を見ても、ロシアでは“暗殺”が横行していることは明らかだ。それを考えると、共産主義国家や軍事政権下の国家では何でもあり・・・？もつとも、ノグクの暗殺は外見上はあくまで交通事故だから、もしウィシクが出馬を諦めなかったら、ひょっとしてウィシクも・・・？

## ■□■強行脱出は？目的地は？その犠牲は？こりゃ面白い！■□■

本作後半ではそんな不安とともに、スリリングな展開を期待する気持ちが高まっていく。本作は130分の長尺だから、後半からクライマックスにかけてはきっとそんな展開にな

るのでは？そう思っていると案の定・・・。

今、自宅を出たウィシクが大勢の警備員を振り切って車に乗り込んだのはどこへ行くため？ホントにそれを阻止しようと思えばそれはきっとできるはずなのに、キム室長がそれを事実上容認したのは一体何のため？また、ウィシクの外出を巡るトラブル発生中に娘のウンジンが瀕死の重傷を負うというハプニング(?)が発生したのは、一体なぜ？そんな状況下、「ウンジンを緊急に病院へ！」と必死の形相で車に乗り込むウィシクを誰も阻止できなかったわけだが、ここで見せるウンジンの“諸葛孔明のごとき見事な作戦”とは？それをしっかり味わいたい。

しかし、そんな行動をとったウンジンの見返りも大きく、結局ウンジンが乗ったナンバーの車の横っ腹には、大型トラックが真正面から激突してきたから、これはノグクの暗殺と同じ風景だ。さあ、ウンジンの命はどうなるの？他方、ウィシクはウンジンの言うとおりの別な車に乗り換えて本来の目的地に向かったが、その目的地とは？それは、ノグクが周到に準備した、野党総裁ウィシクが立候補宣言をするための集会会場だが、そこに支持者たちはどのくらい集まっているの？また、キム室長のどす黒い計画に気づいているデグォンはそんな事態の中、どんな行動を？ここでキム室長に逆らえば、デグォンの命はもとより、デグォンの家族たちの命も危うくなることは明白だ。それが分かっているドンシクは必死にデグォンの無茶な行動を止めようとしたが、その熱き議論は？そして、激論の末に2人がたどり着いた結論は？

ここまで書いたら十分だろう。その後のスリリングな展開とあっと驚く結末はあなた自身の目でしっかりと！とりわけ、ラストのラストで、諜報機関を辞めた(クビになった)デグォンが妻と共に銭湯を開くエピソードでは思わず涙・・・。

2021(令和3)年6月25日記